⑥校区での見守り基準の有無とその内容

• 有無

見守り基準の有無をみると（表17)、「決めている」と回答した者が、1人のみであった。

表17　見守り基準の有無

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
決めている	1	2.0	1	5.6	0	0.0
決めていない	35	70.0	16	88.8	19	59.4
無回答	14	28.0	1	5.6	13	40.6
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

• 内容

見守りの基準の有無で「決めている」と答えたもので、その具体的な内容は、「月2回の配食時、健康状態の悪い方は電話、訪問等集落内は3日に一度の割合で行ったり来たりしている」「民生委員の立場では決まっているが、その他の立場では決めていない」であった。

• 早期に対応できた事例の有無

見守りの基準の有無で「決めている」と答えたもので、見守りの基準により早期に対応出来た事例の有無をみると、「ある」が1人であった。

⑦見守りの効果

見守りの効果を項目別にみると（表 18、図 15）、「地域の方々の結びつきが強くなる」24 人（66.7%）が最も多く、次いで「困ったことがあれば、相談してくれるようになる」18 人（50.0%）、「困っている方の援助につながる」15 人（41.7%）、「困っている方を早期に把握できる」13 人（36.1%）の順となった。

表18　見守りの効果（複数回答）

	全体 n=36		北谷 n=16		長山 n=20	
	人数	%	人数	%	人数	%
困っている方を早期に把握できる	22	61.1	9	56.3	13	65.0
困っている方の援助につながる	15	41.7	7	43.8	8	40.0
孤立している方を早期に把握できる	13	36.1	5	31.3	8	40.0
孤立している方の援助につながる	9	25.0	3	18.8	6	30.0
困ったことがあれば相談してくれるようになる	18	50.0	7	43.8	11	55.0
地域の方々の結びつきが強くなる	24	66.7	9	56.3	15	75.0
地域での他職種間の連携がよくなる	6	16.7	2	12.5	4	20.0
その他	2	5.6	1	6.3	1	5.0
合計	109	302.9	43	269.1	66	330

⑧見守りの困難な点

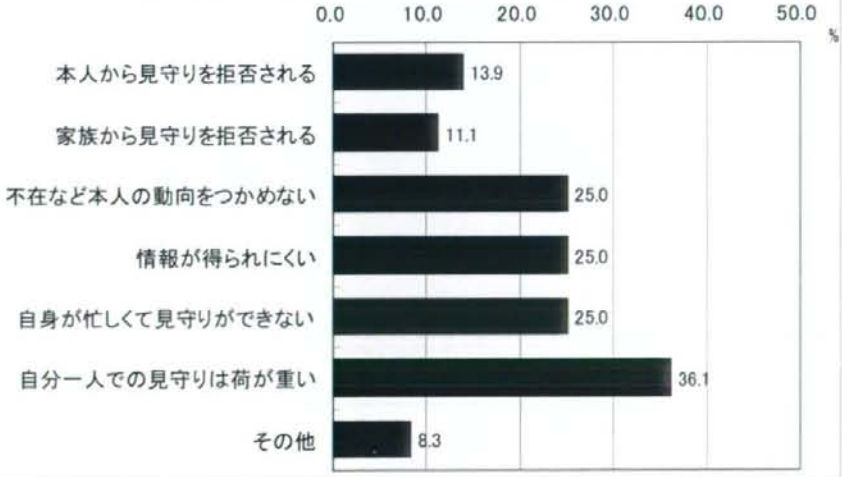
見守りの困難な点についてみると（表 20、図 17）、「自分一人での見守りは荷が重い」13 人（36.1%）が最も多く、次いで「不在など本人の動向をつかめない」「情報が得られにくい」「自身が忙しくて見守りができない」9 人（25.0%）の順となった。

「その他」には、「息子さんのところにいるので動向がつかめない」「地区の住民でないので見守りができない」「見守りとわからなく何気なく見守ること」があった。

表19　見守り活動時の困難な点

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
本人から見守りを拒否される	5	13.9	1	7.7	4	17.4
家族から見守りを拒否される	4	11.1	1	7.7	3	13.0
不在など本人の動向をつかめない	9	25.0	3	23.1	6	26.1
情報が得られにくい	9	25.0	0	0.0	9	39.1
自身が忙しくて見守りができない	9	25.0	2	15.4	7	30.4
自分一人での見守りは荷が重い	13	36.1	4	30.8	9	39.1
その他	3	8.3	3	23.1	0	0.0
合計	52	144.4	14	107.8	38	165.1

図16　見守り活動時の困難(複数回答)



⑨現在自分が抱える見守りに関する問題の解決に必要なこと

- **情報収集や個人情報の保護について**

・ 一人で3集落を見ており、他集落の見守り方に対して近所の方にお願いしている。早く情報を入手することができない今後の課題と思っている。
・ どうしても動向を知る必要がある時には、近所の人や親類縁者に聞く。
・ 本人が安心できる環境つくり（個人情報保護）

➢ **支え合う仕組みづくりについて**

・ 地域住民のつながり、支え合う体制が必要。
・ 区長民生員の方との話し合いをすること。ボランティア等を通じて皆で検討する。
・ グループで見守り班を作りカバーしあう。

・ **その他**

・ 足をはこび話し合いを重ねる。
・ 負担にならない程度に見守りが出来るとよい。
・ 見守り活動は、退職後ならばできるかもと思う。
・ このような活動ははじめてなので、何もわからない。

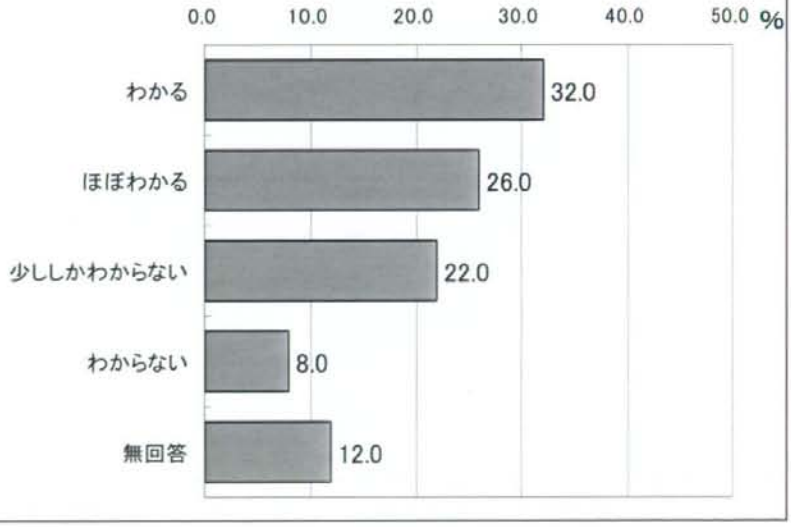
⑩担当地区の高齢者の人数の把握の有無

担当地区に住んでいる高齢者の人数把握についてみると（表 20、図 17）、「わかる」「ほぼわかる」が 16 人（58.0%）であり、約 6 割が把握していた。

表20　担当地域の高齢者の数の把握状況

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
わかる	16	32.0	10	55.6	6	18.8
ほぼわかる	13	26.0	6	33.3	7	21.9
少ししかわからない	11	22.0	1	5.6	10	31.3
わからない	4	8.0			4	12.5
無回答	6	12.0	1	5.6	5	15.6
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

図17　担当地域の高齢者の数の把握状況



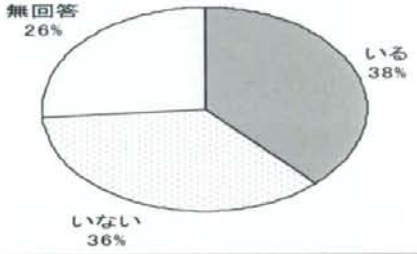
⑪担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無

担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無をみると（表21、図18）、「いる」と答えたものが19人(30.0%)、「いない」と答えたものが18人(36.0%)、「無回答」が13人(26.0%)で、3割がいると回答していた。

表21　担当地域の高齢者の中で情報が得られにくい人の有無

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
いる	19	38.0	5	27.8	14	14
いない	18	36.0	12	66.7	6	6
無回答	13	26.0	1	5.6	12	12
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

図18.　担当地域に情報が得られにくい高齢者の有無



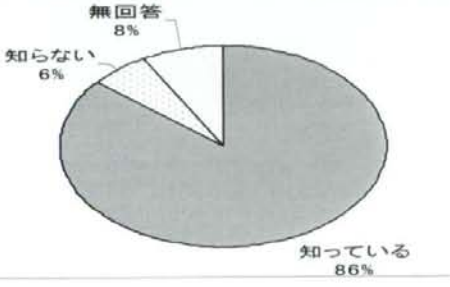
⑫高齢者ふれあいサロンの認知の程度

高齢者ふれあいサロンの認知の程度は、43人（86.0%）が知っていると回答していた（表22、図19）。

表22　高齢者ふれあいサロンの認知の程度

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
知っている	43	86.0	17	94.4	26	81.3
知らない	3	6.0	0	0.0	3	9.4
無回答	4	8.0	1	5.6	3	9.4
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

図19.　高齢者ふれあいサロンの認知の程度



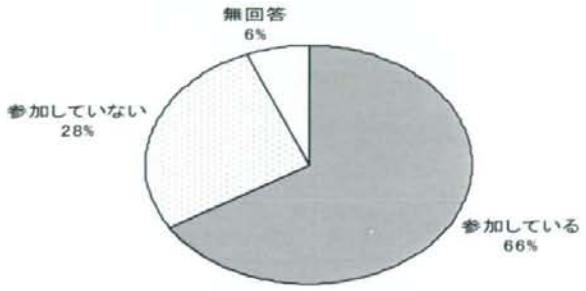
⑬高齢者ふれあいサロンの参加・協力状況

高齢者ふれあいサロンの参加・協力状況は、33人(66.0%)が参加・協力していると回答していた。(表23、図20)

表23　高齢者ふれあいサロンの参加・協力状況

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
参加している	33	66.0	12	66.7	21	65.6
参加していない	14	28.0	6	33.3	8	25.0
無回答	3	6.0	0	0.0	3	9.4
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

図20. 高齢者ふれあいサロンの参加・協力状況



⑭見守り活動についての意見

- 今後は見守を必要とする人数が多くなりお世話をする者も高齢になるため、住民全員が協力していきたい。
- 区の住民は約40名のうち65歳以上は33名となり全員がお互いに見守りをしているようなもの。特別見守りをしなくとも毎日のように顔を合わせる。一人暮らしで病気で寝込んでいる人は今のところいない。現場では一人暮らしして倒れると身内が連れて行くようである。
- 地区の方々で見守りを行ったほうがよいと考える。
- 地域全体が意識を持っていただければありがたい。
- 自分自身高齢なのでどうしてよいかわからない。
- 安心して暮らせる地域にするには見守り活動も必要と思う。高齢化社会になっている今、地域の信頼関係は欠かせないと思う。もう少し思いやりをもつような教育も必要かもしれない。
- 日常の生活でさりげなく見守り、変化があれば、しかるべきところに連絡し、対処を求め、またその後のかかわり方の指導を受ける。それくらいのことしかできないと思う。
- まず隣近所のコミュニケションが大切であると思う。近年マンション、アパートなども増えて、付き合いがしにくくなっている。どの年齢層も関心をもてる構築が大切だと思う。
- 長山町ふれあいサロンを毎月行っているが特に高齢者だけではない。
- グループを作り話し合う。
- たくさんの人と交流を進めたい。
-

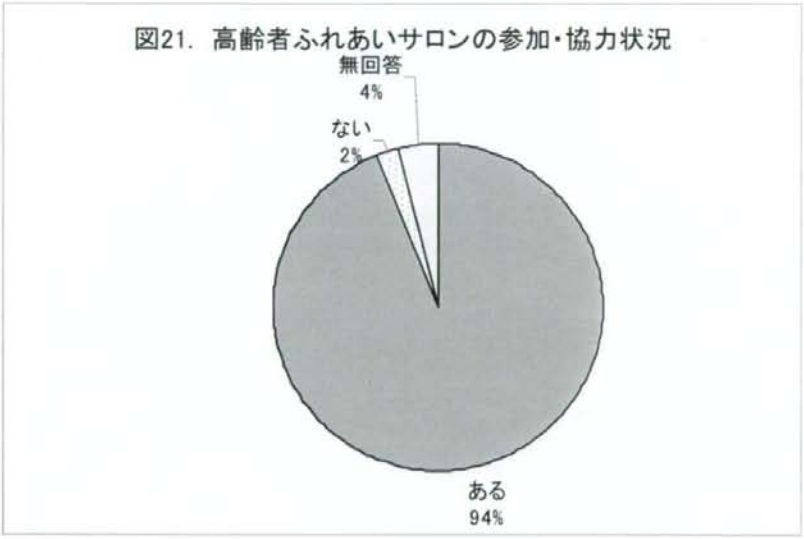
(5)孤立死の状況

①孤立死の言葉の認知の程度

「孤立死という言葉を聞いたことがあるか」という問いに対し、「ある」と答えたものは47人（94.0%）で約9割が聞いたことがあると答えた（表24、図21）。

表24　孤独死という言葉の認知の程度

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
ある	47	94.0	17	94.4	30	93.8
ない	1	2.0	1	5.6	0	0.0
無回答	2	4.0	0	0.0	2	6.3
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0



②担当地区で孤立死の危険性が高いと考えられる方の有無

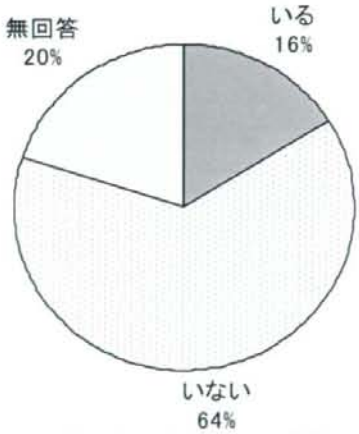
• 有無

「担当地域に孤立死する危険性が高いと考えられる方はいるか」という問いに対し、「いる」と答えたものは 8 人（16.0%）で「いない」と答えたものは 32 人（64.0%）、「無回答」は 10 人（20.0%）であり（表 25、図 22）、2 割弱が危険性の高い人がいると回答している。

表25　孤独死する危険性が高いと考える人の有無

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
いる	8	16.0	2	11.1	6	18.8
いない	32	64.0	16	88.9	16	50.0
無回答	10	20.0	0	0.0	10	31.3
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

図22. 担当地域に孤立死をする危険性の高い方はいるか

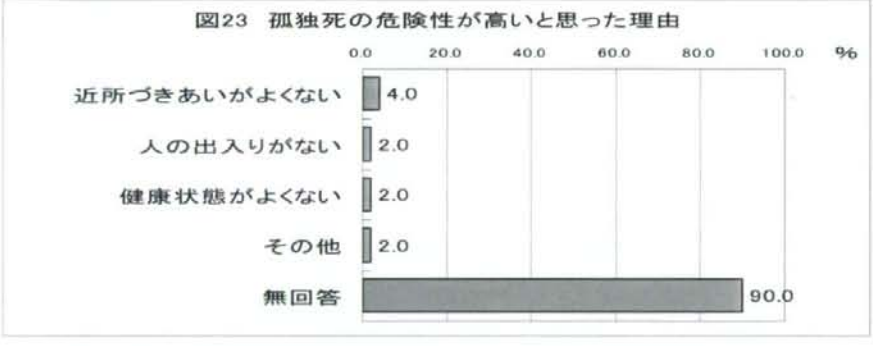


・理由

孤立死の危険性が高いと思った理由を表 26、図 23 をみると、近所付き合いがない、健康状態がよくない、人の出入りがないことが孤立死のハイリスクと認識し挙げている。

表 26　孤立死の危険性が高いと思った理由

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
近所づきあいがよくない	2	4.0	0	0.0	2	6.3
人の出入りがない	1	2.0	0	0.0	1	3.1
健康状態がよくない	1	2.0	1	5.6	0	0.0
その他	1	2.0	0	0.0	1	12.5
無回答	45	90.0	17	94.4	28	87.5
合計	50	100.0	0	0.0	32	100.0

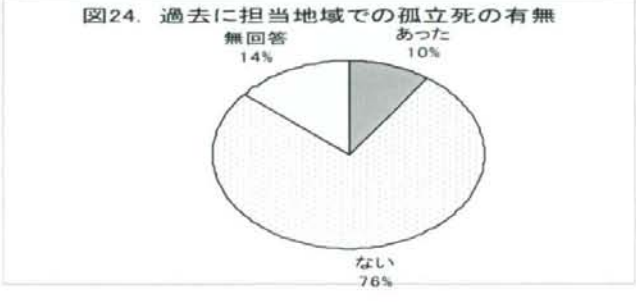


③過去の担当地区での孤立死の有無

「過去に担当地域で孤立死があったか」という問いに対し、「あった」と答えたものが 5 人（10.0%）、「ない」と答えたものが 33 人（76.0%）で、約 1 割が孤立死があったと回答している（図 26）。

表27　過去の地区内での孤独死の有無

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
あった	5	10.0	2	11.1	3	9.4
ない	38	76.0	16	88.9	22	68.8
無回答	7	14.0	0	0.0	7	21.9
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0



過去の担当地域内での孤独死の状況

北谷地区	・民生員をしていたとき、隣の集落で一人暮らしの男性が心臓麻痺を起こし急死していた。近所の人が用事で訪ねたらそこで発見し行政機関に連絡を取ったことがある。 ・孤独死は5年前1件、10年前1件あった。
長山地区	・近くの老人が夜倒れていてもわからなかった。 ・電気がつきっぱなし、戸が開きっぱなし、いつもとちがった。近所の方が発見した。

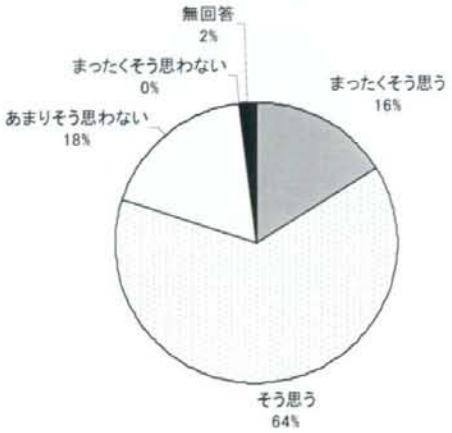
④見守り活動による孤独死の予防の可能性の有無

「孤立死を見守り活動で防げるか」という問いに対し、「とてもそう思う」と答えたものが8人（16.%）、「まあそう思う」と答えたものが32人（64.0%）で、約8割が見守りで防げると思っている（表29、図25）。

表29　孤独死の地域見守りによる防止の可能性

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
とてもそう思う	8	16.0	2	11.1	6	18.8
まあそう思う	32	64.0	14	77.8	18	56.3
あまりそう思わない	9	18.0	2	11.1	7	21.9
とてもそう思わない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	1	2.0	0	0.0	1	3.1
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

図25. 孤立死を見守り活動で防げるか



⑤孤立死を防ぐための方法の提案や意見

i) 家族や本人ができること

家族・親戚との連絡が最も多かった（表 30-1）。

表 30-1　家族や本人ができること

- **本人が出来ること**
  - 当区の場合、近所の方と間に日顔を合わせるので、見えない日は家を訪れる、また、出かけるとき（長期留守）は一声かけていく。
  - 一人暮らしで動けない人が出来たら区では対策をとり、誰かが毎日交代でちょっとのぞく（2～3 年前までは火の用心回りがあって一戸一戸のぞいたのですが、高齢者が増えて取りやめた。北谷は高低差があるので地区内を歩くのもやっとである。）
  - 近所の人、民生委員に正確な現状を話してくださること。
- **家族との連絡**
  - 家族の場合電話で安否を確認する。

ii）地域でできること

身近な隣近所等の注意等が多かった（表 30-2）。

表 30-2　地域でできること

- **身近な隣近所等の注意**
  - 1 人暮らしの家には、夕方になると電気がついているか、近くの者同士心がけしている
  - 本人の負担なく受けられるのは、同年代の人、近所の人などの定期的な超えかけ（ふれあい）で、それとなく安全をたしかめること。あまり付き合いがないのに訪問はやりづらい。
  - 2 から 3 日または、1 週間ほど姿が見えなかったり、カーテンが閉まっていたりしたときは近所の人に話を聞いたり、訪ねたりするとよい。
  - 地区の行事、日常会話、近所付き合いにおいて、住民の気配りが大切である。
  - 地域の場合郵便受けなどに新聞がたまっている場合家を訪問する。
  - 昔の向こう三軒良となりの関係を築き上げる。
  - 朝晩声賭けをする（1 日 1 回でも）持続すればお互い打ち解け距離感も近くなり相談することも起きる。
  - 近所の方の日頃の見守りが一番大切と思う。
- 地区での役職として見守りを行う
  - 民生委員の立場から、近隣の人がお互いに交流がよい様に、対象者の隣近況に常に交流をもち守秘義務を守りながら見守る。
- **ネットワークづくり**
  - 可能なかぎり、目配り、気配りが出来るネットワクをつくる。ミマモリタイなどもいい例
  - 組織体制を作れば、まず地域住民のつながりや支えあう体制（活動）が必要と思う。
- **地域全体で意識を高める**
  - 地域全体が意識を高めてもらう。
  - 婦人会などの加入者が減少しているので、団体へ見守り隊を委ねることは加入者の減少につながる。見守り隊は地域が中心に考えることが大切である。
  - 新聞を配達する人とか牛乳配達する人がちょっと気をつけたらと思う。

iii）行政および専門機関に求める役割（表 30-3）

表 30-3　行政および専門機関に求める役割

- **行政および専門機関に求める役割**
  - 孤独死とは老人が一人または夫婦が老人になった時が多いと思う。北谷地区においては 7-8 割が孤立であると考える。行政による強力な対策が必要である。家族が老人とくらしやすい。また財政的にも優遇する政策が必要であると思う。
  - 行政専門機関はいろんな相談にのったりして問題点を解決していくとよい。
  - 地域の現状を把握していただき、困ったことにおいては常に対応してもらう。
  - 情報は常にながしてもらう。
  - 地域が 1 人立ちで活動できるよう指導してもらいたい。
  - （見守り隊は地域が中心に考えることが大切であるが）行政は行政の仕事をしっかりしてほしい。ややもすると責任を地域に押し付ける方向に行きかねない。
  - 単身高齢者宅と行政機関との非常電話等設置
  - 地域ボランテアとのかかわり方等検討

(6) 地域包括支援センターについて

地域包括支援センターについては、32 人（64.0%）が知っていた（表 31）。相談経験があった者は 2 割程度であった（表 32）。

表31　地域包括支援センターの認知度

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
知っている	32	64.0	14	77.8	18	56.3
知らない	14	28.0	3	16.7	11	34.4
無回答	4	8.0	1	5.6	3	9.4
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

表32　地域包括支援センターでの相談経験の有無

	全体		北谷		長山	
	人数	%	人数	%	人数	%
あり	10	20.0	3	16.7	7	21.9
なし	32	64.0	14	77.8	18	56.3
無回答	8	16.0	1	5.6	7	21.9
合計	50	100.0	18	100.0	32	100.0

表33　見守りで困ったときに相談している場所

- 地域包括支援センター
- 地域包括支援センターまたは福祉事務所の高齢課（引きこもり、雪下ろしの事で相談）
- 高齢者相談窓口
- 市役所、地区社協（2 名）
- 民生委員と区長（3 名）
- 民生委員（2 名）
- 区長会。区長、地区社協に連絡する。
- 民生委員同志で相談したり、市の関係機関にきいたりしている。
- まず地域包括支援センターに連絡してから、社協、近隣の人、区長と協力して対応する。
- 見守りは経験ないが、地域で困ったことはまず地域の信頼ある方に相談する。
- 地域民生委員と相談し市行政の中で対応していくとよい。

2. インタビュー調査結果

1)目的

本章では、高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のありかたについて検討を行うために、高齢者の見守りに関係する地域住民と見守りが必要な高齢者を支援している専門職へのインタビューデータを基にした質的帰納的分析を行った。

本研究では、地域見守り組織としての活動は実施されていないが、日常的に住民が近隣同士で見守りをしている地域として勝山市北谷地区と当該プロジェクトを通じて地域見守り組織を立ち上げ、活動を展開しようとしている地域として勝山市長山地区を選択した。両地域間で高齢者の見守りに関係する組織の代表者や見守りが必要な高齢者を支援している地域包括支援センター等の専門職がとらえている見守り対象となる高齢者の状況、見守り支援のためのテクニックや組織づくりなどの差異を比較検討することを目的としている。

2)方法

(1) 調査対象者と方法

本研究のデザインは質的帰納的研究である。

対象者の概要と面接の実施状況については、表1に示すとおりである。調査対象者は、高齢者の見守りに関係する地域住民と見守りが必要な高齢者を支援している地域包括支援センター等の専門職である。地域住民については、北谷地区は5人と長山地区5人の計10人、見守り組織を支援してきた専門職については、6人である。北谷地区、長山地区は2008年12月に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を研究者らが実施した。面接時間は約60分程度である。面接の形態は、グループで実施した。見守り組織の地域住民に面接を行う場合は、地域包括支援センター等の職員に同席してもらい、意見をいいやすい雰囲気になるように努めた。

インタビューガイドの内容は、大まかには「①地区の高齢者の状況と高齢者見守り活動の現状」と「②見守り活動実施に向けての課題」とに分けられる。インタビューガイドは見守り組織の地域住民と専門職はともに、同様のものを使用した。

以上のインタビュー内容について、調査対象者の同意を得てICレコーダー等に録音し、逐語録を作成した。なお、すべての対象者から録音の同意を得ることができた。

表1　北谷地区・長山地区におけるインタビュー対象者の概要

［高齢者の見守りに関係する地域住民］

面接状況	性別	年代	地域での役職	地区
グループ面接1	男性	60代	区長	北谷地区
グループ面接1	男性	70代	老人クラブ会長	
グループ面接1	男性	70代	地区社会福祉協議会会長	
グループ面接1	女性	60代	民生・児童委員	
グループ面接1	女性	30代	地区社会福祉協議会	
グループ面接2	男性	60代	区長	長山地区
グループ面接2	男性	70代	区役員	
グループ面接2	男性	70代	前民生・児童委員	
グループ面接2	女性	60代	民生・児童委員	
グループ面接2	女性	70代	老人クラブ	

［地域包括支援センター職員］

面接状況	性別	年代	職業
グループ面接1	女性	40代	保健師
グループ面接1	男性	20代	社会福祉士
グループ面接1	女性	20代	保健師
グループ面接1	女性	50代	社会福祉協議会職員
グループ面接1	男性	40代	社会福祉協議会職員
グループ面接1	男性	20代	社会福祉協議会職員

(2) 分析

逐語録から見守り支援のありかたや組織づくりに関連すると思われる内容を意味毎にくぎり、可能な限り、対象者の表現を活用し、コードをつけた。さらに、コードをもとに、北谷地区と長山地区との特性を比較しながら、カテゴリを作成し、さらにカテゴリをまとめて、テーマとした。

(3) 倫理的配慮

調査対象者には書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し、対象者から文書にて同意を得た。また、調査協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止可能であること、研究目的以外では得られたデータを使用しないことを説明した。なお、本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会から承認をうけて実施している。

3) 結果

(1) 高齢者の見守りに関係する地域住民へのインタビューの質的分析結果

北谷地区と長山地区とそれぞれ地域別にみた地域住民へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表2に示す。

表2 見守り住民に対するインタビューから得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ	
	北谷地区	長山地区
見守り対象となる高齢者	一人暮らし、高齢者夫婦世帯	
	集まりに誘っても参加しない高齢者	
	同居家族がいるが日中は一人の高齢者	
	認知機能低下による問題行動がある高齢者	
見守りのテクニック	情報収集の方法	
	普段から情報を把握しておく	
	既存サービスを使って安否確認をする	
	コミュニケーションの取り方	
	高齢者のニーズに対応する	
		認知機能低下の把握の方法
		ふれ合いサロンを通しての関わり
見守り活動の方向性	近所同士が見守りをする	
	ネットワークづくりが必要	
	地区の特徴を活かす	
	守秘義務	
	行政との協力も必要	地区役員から輪を広げる
	見守りマップの作成	助け合いの精神が必要
見守り困難な点	状況が把握できない	
	関わりの程度が判断できない	
	関わりを拒否する高齢者	
		高齢者の変化や対応が難しい
		地域つながりがの希薄化

① 見守り対象となる高齢者

テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリとコードの一覧については、表2-1に示すとおりである。両地区に共通するカテゴリは「一人暮らし、高齢者夫婦世帯」であった。

長山地区では、「集まりに誘っても参加しない高齢者」「同居家族がいるが日中は一人の高齢者」「認知機能低下などによる問題行動がある高齢者」であった。

表 2-1 テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ	
	北谷地区	長山地区
見守り対象となる高齢者	**一人暮らし高齢者、高齢者夫婦世帯**	
	一人暮らしの訪問をしている。民生員担当毎に分けて、12～13 件一人担当している。	一人暮らし、老夫婦世帯を気にかけている。人数は、17－18 人。
	基本的に一人暮らしというと、65 歳からをいっている。	一人暮らしの人が気張っている。
	女性が多い	一人暮らしを中心に回っている。
	一人暮らし、高齢者夫婦世帯と把握している。	みんな女性。男性は、5～6 人。しっかりした人もいる。
	二人いると気にならないけれど、一人だと気になる。	
		集まりに誘っても参加しない高齢者
		老人クラブにも、サロンにも来ない人もいる。
		明日行くよ…と声をかけても、なかなか来ない。
		同居家族はいるが 日中は一人の高齢者
		若い方と生活していて、日中は一人という人がいる。
		若い方といる方は、夜まで帰ってこない人は、元気な間はいいが、体が悪くなったときに悪い。昼間の一人暮らしが一番難しい。
		認知機能低下による 問題行動がある高齢者
		時間的に分からなくなる人もいる。夕方になると赤信号ばかりを渡る人がいる。
		近所で自転車で斜め横断する、幾ら言っても治らない人が一人いる。
		少し認知症がある方
		認知症は、話が通じなくなる、同じを話を何度もする、ふれあいサロンに誘ってもすぐに忘れてしまう。

② 見守りのためのテクニック

テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリとコードの一覧については、表２－２に示すとおりである。両地域に共通するカテゴリは「情報収集の方法」「普段から情報を把握しておく」「既存のサービスを使って、安否確認をする」「コミュニケーションの取り方」「高齢者のニーズの対応する」であった。

長山地区からは「認知機能の低下の把握方法」「サロンを通しての関わり」のカテゴリがみられた。

表 2－2-1 見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ	
	北谷地区	長山地区
見守りのテクニック	**情報収集の方法**	
	近所同士が郵便・新聞受け、電気を気にかける	
	煙突の煙を気にかける	家だけでなく何かあったときにはわからないので、近所の方にも窺っている。
	普段から情報を把握しておく	
	互いに声を掛け合っている	ふれあいサロンを通して知る
	留守にするときは近所に連絡する	日頃から気にかける
		道であったときに、話をして状況を把握している。
		元気なときから、声をかける
	既存サービスを使って安否確認をする	
	緊急通報システムを付けている	
	民生委員が定期的に訪問	
	老人クラブのゆうあい訪問	
	区長が配布物を定期的に持って回り必ずかかわる	近所から電気が数日灯らないと区長に連絡があった
	日赤法師団の訪問	
	給食サービスの弁当がそのままになっているのを発見した	
	コミュニケーションの取り方	
	顔を見て話す	押しつけないようにしている
		道で出会うと声をかける。

表 2−2-2 見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ	
	北谷地区	長山地区
見守りのテクニック	**高齢者のニーズに対応する**	
	季節限定者や住民票がないが居住している方にも福祉サービスが受けられるようにしている	同居家族が仕事に出かけてから階段から転落した所を訪問、救急車を呼んだ
		家の前で転倒して起き上がれなくなる人がいるので気にかけている
		10m 歩くのに 0-3 分かかる人がいるので、外出時には気にかけている
		認知機能低下の把握の方法
		話す内容が繰り返しが多くなる
		話し方が執拗になる
		一方的に自分のことを話す
		いつものパターンと違う
		ふれ合いサロンを通しての関わり
		サロンと気張ってくれている場所・人がいるというのが特徴かな。
		今までと違って、サロンをするようになって、かすかでもどこにも出ない人の情報が入るようになった。
		サロン出でてきて下さる方は、把握できているのでありがたい
		サロンをするようになって、ボランティアからの情報もある。
		サロンをするようになって、高齢者からの情報もある。
		ふれ合いサロンを進めるために声かけをしている

③ 見守り活動を実施していく上での困難

テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 2-3 に示すとおりである。両地区に共通するカテゴリは「状況が把握できない」「関わりの程度が判断できない」「関わりを拒否する高齢者」があった。長山地区では、「高齢者の変化や対応が難しい」「地域のつながりが希薄化」であった。

表 2-3 見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ	
	北谷地区	長山地区
見守り困難な点	**状況が把握できない**	
	近所に知らせずに家を空ける高齢者	
	家が離れているので、冬は訪問しにくく電話で状況を聞くようにしている	外出しない人は把握しにくい
	集落同士が離れているので、細かく把握することは難しい	電話がない人は安否確認しにくい。
		誰が住んでいるか把握できないところがある
		交流がない人は情報が入らない
		親類、近所の人が把握していないうちもある
	関わりの程度が判断できない	
	どこまで立ち入ったらいいのかわからない	責任が重い
	関わりを拒否する高齢者	
	支援が必要なことを知られたくない	訪問しても、出てこない人も困る。
	支援を拒否する人がいる	誰とも関わりをもたずにいる人
	民生委員以外の援助に抵抗がある	
		高齢者の変化や対応が難しい
		普段を知らないと、変化が分からない
		普段を知らないと、どう対応していいのか分からない。
		認知症の方の把握の方法が難しい
		24 時間ずっと見ていられない
		地域つながりの希薄化
		我々の年代の人は分かっているが、独立してやってきた若い人は分からない
		今、疎遠になってきた。